



# 「新しい移民」と「主体の複数性」 フランス在住日本人の移住経験の語りの分析と考察

著者	矢野 禎子
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	11301甲第18381号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00125688">http://hdl.handle.net/10097/00125688</a>

博士論文要約

「新しい移民」と「主体の複数性」  
—フランス在住日本人の移住経験の語りの分析と考察—

東北大学大学院文学研究科文化科学専攻  
矢野 禎子

目次

序論

第一部

1 章 「移住」とその研究

1 節 「移民」, 「移住」の定義と本研究で扱う「移住」

2 章 本研究の興味の所在と問題提起

1 節 異文化・言語を生きる主体と移民研究

2 節 仮説と研究目的

3 節 関係する研究領域

3 章 関連する概念, 理論, 考察

1 節 「主体・発話主体」

1 項 哲学の「主体 *sujet*」と考察

2 項 言語学と「発話主体 *sujet parlant*」

3 項 社会学と「主体 *sujet*」あるいは「行為者 *acteur*」

4 項 ライールの「複数の行為者」

2 節 言語人類学と「複数の発話主体とその主観」

1 項 言語的複数性と主観

2 項 発話主体とミクロ社会言語学

3 節 「アイデンティティ」

1 項 「アイデンティティ」の概念とコフマンの考察

2 項 本研究内でのアイデンティティの扱い

4 節 言葉と主体

1 項 言葉と概念

2 項 「語り」

4 章 「複数性」あるいは「多元性」の議論

5 章 まとめ

第二部

1 章 コーパス構築とその分析手法

1 節 本研究のコーパス選択と取り扱う問題

2 章 「語り」コーパス

1 節 「自伝」と「ライフストーリー」

2 節 「移住談 *récit de migration*」

3 節 インタビューによって構築される研究コーパスの問題点

3 章 「理解的面談 *Entretien compréhensif*」

1 節 これまでの面談によるコーパス構築と理解的面談の方法論の特徴

2 節 インタビュイーとインタビュアー

1 項 インタビュアー

2 項 インタビュイー

3 節 面談の進め方とインタビュアーとインタビュイーの関わり

4 節 コーパスの扱いと手法のカスタマイズ

5 節 コーパスの有効性

4 章 本研究のコーパス構築

1 節 理解的面談の方法論参照の妥当性と本研究におけるカスタマイズ

2 節 実際のインタビューの実施とコーパス構築の様子

1 項 情報提供者のプロフィール

2 項 インタビューに対するためらい

3 項 フランス語でのインタビュー実施の問題点と有用性

- 4 項 質問票の作成
- 5 項 本研究の「移住談」の構築からの諸考察
- 5 章 「移住談」の分析・アプローチ方法
  - 1 節 内容分析と談話分析
  - 2 節 談話分析内の「発話行為 *énonciation*」
  - 3 節 全体分析と個別分析
  - 4 節 テーマごとの分析
  - 5 節 分析で着目する言語学的指標
    - 1 項 「主観的形容詞 *adjectifs subjectifs*」
    - 2 項 「人称マーカ *marques de la personne*」
    - 3 項 「談話の結合詞 *connecteurs du discours*」
- 6 章 本研究の限界
- 7 章 まとめ

### 第三部

- 1 章 関連する先行研究の概観と考察
  - 1 節 フランス在住日本人のプロフィール
  - 2 節 フランス在住日本人のフランス／日本に対するイメージ・表象提示
  - 3 節 第二言語習得と「アイデンティティ」
  - 4 節 日本人の談話・ディスカッション
  - 5 節 日本人の対外認知の特徴
  - 6 節 「移住談」に見られるいくつかの特徴
  - 7 節 先行研究の結果に対する考察と本研究におけるアプローチ
- 2 章 まとめ

### 第四部

- 1 章 コーパスの分析
- 2 章 移住談全体のテーマごとの分析
  - 1 節 渡仏・フランス滞在の動機・理由

- 1 項 フランス語習得
  - 2 項 海外生活への憧れ
  - 3 項 人生を変える
  - 4 項 他者の影響
    - 1. フランスでの出会い
    - 2. 他者の意向・意見
    - 3. 子供
  - 5 項 仕事・学業
  - 6 項 考察
- 2 節 就労と収入
- 1 項 職業
  - 2 項 「ちょっとした仕事 **petit travail**」
  - 3 項 他者からの経済援助
  - 4 項 考察
- 3 節 フランス語習得と言語と結ぶ関係性
- 1 項 言語習得の様子
    - 1. 学校での学習
    - 2. 生活の中での習得
    - 3. 上達のコツ
  - 2 項 言語習得の持ち得る様々な意味
    - 1. 仕事における必要性
    - 2. コミュニケーションの拡大
    - 3. 生活適応
    - 4. 第一言語との再会の間
    - 5. 「他者になる」
  - 3 項 フランス語習得の困難
    - 1. 「試練としての言語 **La langue comme épreuve**」
    - 2. フランス語の言語学的難しさ
    - 3. 力不足とストレス、恐怖、フラストレーション
    - 4. コミュニケーションの文化差異
    - 5. クラス内と実生活の差

- 4 項 日本語と結ぶ関係
  - 1. リフレッシュの言葉
  - 2. 仕事の言葉
  - 3. 不快の種
  - 4. 家族内での日本語の継承
- 5 項 考察
- 4 節 人間関係
  - 1 項 日本の日本人との関係
    - 1. 帰省と日本の家族・友人
    - 2. フランス在住日本人との関係
  - 2 項 日本人以外との関係
  - 3 項 考察
- 5 節 フランス／日本に対する表象
  - 1 項 対をなす日仏の表象
    - 1. 働きすぎの日本
    - 2. 配慮に欠けるフランス
    - 3. 「個人主義」と「集団主義」
  - 2 項 その他の表象
  - 3 項 フランスを生きる自身の「自己イメージ」
    - 1. 外国人
    - 2. 立場による差異の発生
    - 3. エスニシティによる差別化の拒否
  - 4 項 考察
- 6 節 今後の予定・将来プラン
- 7 節 移住談全体のテーマごとの分析の結果と考察
- 3 章 主体の複数性に焦点を当てたテーマごとの分析
  - 1 節 使用言語と自己イメージ
  - 2 節 移住談を通して構築される自己イメージ
  - 3 節 表象と現実の乖離
  - 4 節 主体内の意見の不一致

5 節 所属グループと他者との差別化

6 節 人称マーカーに見る所属グループの変化

7 節 「自己相槌」

8 節 主体の複数性に焦点を当てたテーマごとの分析の結果と考察

#### 4 章 ケーススタディ

1 節 ヤス夫「様々な自己定義と自己イメージの構築，その方法」

1 項 日本人，フランス人，レストラン経営者，父

2 項 メタファー

2 節 マサ夫「日本への愛着と距離，表象と現実の矛盾」

1 項 日本との距離，日本への愛着

2 項 「表象と語られる経験の矛盾」

3 節 メイ子「遠距離恋愛，夫との別居，語りを通して構築される価値観」

1 項 遠距離恋愛の末の結婚，フランスでの夫との別居

2 項 行われる選択の説明と移住経験の語りを通して構築される価値観

4 節 ケーススタディの結果と考察

#### 5 章 まとめ

#### 結論

#### 参考文献

#### 補遺

I. インタビューの質問票

II. インタビューの書き起こし

### 本研究の概要

本論はこれまでの移民研究で試みられている定義づけには当てはまらない「フランス在住日本人」の移民の特徴を，それを考察する上で重要と思われる「主体の複数性」に着目しながら明らかにし，彼らの生活実態を丁寧に描写しながら「新しい移民」の概念を提示することを試みるものである。

第一部では移民研究の動向をまとめ、これまでの日本の大きな移民・移住の波を概観しながら本研究の情報提供者である「2年以上フランスに滞在する日本人」がどのような特徴を持つのかを考察する。「移民」と言う語はネガティブな含意があり、もの悲しいイメージが付きまとうが、本研究の情報提供者たちの移住は、暗いイメージやこれまで提示された移民の区分には当てはまらず、新しい移民の区分として扱える可能性が浮かび上る。

彼らの様子や筆者自身の経験から、「主体は複数的で、移住経験にまつわる語りはその主体の複数性が顕著化する場である」という仮説が導き出される。

研究を通して移住経験とその語りが主体の複数化の現れであることを明白化し、またその複数性がどのようなテーマにおいて、またどのような言語的要素や指標を伴い出現する傾向にあるのかを提示するにあたっては「主体」や「アイデンティティ」といったテーマに関する考察を深めることは重要である。さらに、「主体」や「アイデンティティ」に関連する研究において使用が多く見受けられる研究コーパスでもある「語り」や「言葉」についての考察からは「語る」ということは単にメッセージを伝達しているだけでなく、発話主体が語りの中で自己を規定すること、さらに語りが「内包された個人的な社会」の現れであることが浮かび上がる。そのため本研究は情報提供者の「語り」を質的アプローチによって分析することが適していると結論する。

第二部では本研究が本論内で焦点を当てる問題を明示し、これについての考察を深めるために「語り」のコーパスを使用することの妥当性を確認する。そして本研究で使用したコーパスの構築の際に参照した理論、実際のインタビューの実施の様子や情報提供者のプロフィールを確認し、コーパスの構築とその分析方法についてまとめる。

本研究で使用するコーパスは、インタビューによって収集した情報提供者のフランス移住に関する自伝的語りである「移住談」である。

本研究のコーパス構築のために行ったインタビューは、インタビューーとインタビューアーの積極的な関係構築や、インタビューを理論の検証の場ではなく構築の場と捉える視点などの特徴を持つ、コフマン J.-C. KAUFMANN の「理解的面談 *Entretien compréhensif*」の手法を参考にしながら、2014年から2017年にかけて15名の在仏2年以上の日本人に対して行われた。



構築したコーパスの特徴の中でも特筆すべき点は、日本人の筆者を前に日本人がフランス語を用いて行ったものが半数以上を占めるということである。このような状況下でのインタビューの実施は、それが彼らの一つの言語的現実であるということ、そしてフランス語の文章構築が文法的主語、動詞の動作主を置くことを要請することに起因する。新言語を用いた語りから、またその言語的特徴から、主語を省くことが自然である日本語を用いた談話からは見えない部分にたどり着ける可能性がある。発話へのためらいや表現の制約などが発生することもあると考えられるが、インタビューの実施後、数名の情報提供者から「日本語での実施ではこんなに話せなかった」といった発言があったことはすでに、言語による「主体の複数化」を裏付け、本研究でこれを行った有用性、さらには妥当性を示しているとも言える。

移住談はすべてのインタビューを一つのまとまりとして扱った全体分析と、いくつかのインタビューについてはその特色や興味深い点をさらに深く考察すべく個別分析を行う。分析の際には発話や談話を一見して読み取れる内容の他、発話に現れる「主観の指標」ともいえる形容詞や人称マーカー、接続詞などの言語的要素についても着目する。

第三部では本研究のテーマに関連する先行研究を概観し、それに対する考察や本研究においてさらに発展させられる点をまとめる。

大規模な統計調査によって明らかにされたフランス在住日本人のプロフィールを概観からは、フランスへ移住した日本人は「経済的な生活の向上」が目的ではないことが特徴として指摘される。さらに彼らを滞在年数や滞在目的、職業などから3つのグループに大別できることが提示されるが、本研究の情報提供者でこのグループ分けの特徴に完全に一致するものはいない。また彼ら自身が自分をどのように捉え分類しているかも客観的な指標に基づいたグループ分けの下では取り扱うことが困難な点であるため、質的アプローチによる分析を行うことで、新たなグループ分けの指標の提示や特徴づけができる可能性がある。

在仏日本人の持つフランス／日本に対する表象に関する先行研究からは、彼らが両国に対し「中立的」で「対をなした」表象やイメージを提示するという、他の移民グループから導き出される特徴には当てはまらない興味深い傾向が明らかとなる。この傾向は本研究のコーパスにも見られるが、情報提供者がどのような経験や考えに基づいてそれを行っているのか、語りの中でそれがどのように機能

したり、情報提供者がそれらをどのように取り扱っているのか、彼らの「想像界 *imaginaire*」や「幻想 *fantasme*」がそれにどのように関連しているのかという点に着目する。

外国語学習クラスを観察した研究からは、学習者が抱くその言語が使用される国のイメージが言語学習クラスによって媒介されている可能性が指摘される。そして学習者が習得目標言語の特徴として捉えているものに対し自身の「アイデンティティ」を様々に構築し、状況によって流動的に演じ変えている可能性が明らかとなる。また言語習得者が「ネイティブになりきる」ことはネイティブの視点からは必ずしも好ましいと捉えられない可能性などの興味深い指摘もなされる。移住先の言語の習得と運用はその移住経験や移住先の国に対するイメージ、そこでの人間関係の構築などに大きく関連するものである。そのため本論では情報提供者が使用言語にどのようなイメージを抱き、またそれを使用する自分自身をどのように捉えるかに着目した分析を行うことで、新言語習得とその運用が単なるメッセージの伝達手段の取得以外に持ち得る意味を考察していく。

日本人の談話や会話構築の特徴に関する先行研究では、会話に相槌が多用されること、複数の参加者の協働の中で談話が構築されること、直接的な感情・感覚表現が少ないことなどが指摘されている。本研究で使用するコーパスは先行研究が分析する会話やディスカッションとは違い、参加者が「語り手」と「聞き手」に分かれている。さらにフランス語を用いて行ったものが半数以上を占めるという違いもあるため、先行研究で提示された特徴がこれらの条件下でも保持されるのか、あるいは別の形や役割をもって発現するのかなどに注目する。

日本人の対人認知の特徴を述べた先行研究では、自己との関連の薄い他者に対して中立的な立場をとることや、相手からの評価が必ずしも本音ではないという前提を持っていることなど、先に見た日本人の日仏に対する表象提示に関する研究の結果とも関連付けられる特徴が明らかにされている。これをもとに日本人の日仏に対する表象提示の特徴を考察すると、先行研究において彼らが語る「フランス／日本」は彼らの主観から切り離された状態であるとも考えることができる。情報提供者が「私 *je*」として発話の中に存在する「移住談」を用いる本研究では、彼らの持つ両国に対する個人的な表象構築と、複数的であると予測されるそれぞれの情報提供者の抱く表象をより深く考察する。

移住談をコーパスに用いた先行研究からは、その構造が「ヒーロー物語」のそれに類似する点を持つこと、また情報提供者「私 *je*」の「英雄化 *héroïsation*」

に役割を果たすであろう移住談内に見られるいくつかのテーマや表現が存在することが指摘されている。しかしここで述べられている特徴を顕著に示す談話は本研究のコーパスの中では少数である。これには情報提供者のプロフィールの違いや、言語・文化的側面からの談話の構築方法の差異などが関連すると考えられるため、本研究の移住談の分析では先行研究で指摘された特徴と本研究のコーパスの合致点の有無を探り、これに一致しない場合は本コーパスの持つ新たな特徴づけを行うことを試みる。

先行研究の概観から、フランス在住日本人の大まかなプロフィール、日本人の対人認知や談話構築の特徴、外国語習得の持ち得る意味や学習者の行動の傾向、「移住談」の持つ特徴が明らかとなるが、これらの研究は主体の均質性が前提となっていて行われている。しかし、生活の場や取り巻く文化・言語が変わる移住の経験に対する考察に「主体の複数性」の概念を導入することは不可欠であると考えられる。そのためコーパスの分析では「主体の複数性」を念頭に置いた分析を行い、強引な一般化を避けた丁寧な分析と記述をもってこれまでとは違った「異文化・言語を生きる主体」の考察と、その特徴の提示を試みる。

第四部では 15 名のフランス在住日本人とのインタビューを分析し、その結果に対する考察を行う。分析とその結果の提示は、インタビューを俯瞰的に捉えそこで語られた事柄を頻出するテーマごとに分析したもの、「主体の複数性の現れ」と考えられるテーマや発話に焦点を当て分析したもの、3 つの個別のインタビューに対するケーススタディという 3 つの項目で行う。

まず本研究の情報提供者の移民の特徴や傾向を明らかにすべく、移住談の構成要素として重要と思われる「渡仏・フランス滞在の動機・理由」、「就労と収入」、「フランス語習得と言語と結ぶ関係性」、「人間関係」、「フランス／日本に対する表象」、「今後の予定・将来プラン」の 6 つのテーマから移住談を分析する。

フランス滞在の動機に関しては先行研究で指摘されている通り、本研究の情報提供者の移民が「伝統的経済移民」とは一線を画すことが裏付けられた。その上彼らはフランスで日本と同程度以上の収入を得る困難を語り、さらには彼らがそれを事前に想定、または前提としている様子が浮かび上がる。

フランス語の習得に関しては、本研究の情報提供者の全員からフランス語を習得する姿勢が語られる。4 名の情報提供者はインタビューを日本語で行ったが、

全員がフランス語を用いて日々の生活を送っている。言語習得については他の移住談の特徴として挙げられる「困難の強調」よりも、自身が既にできたことなどが肯定的に語られる傾向が見られる。15名全員に渡仏後も生活の中で日本語を使用する場面があり、この機会は多くの場合心的安定など肯定的に捉えられているが、数名の情報提供者は使用頻度の少なさを強調したり、日本語の使用を不快に感じる場面があることを述べたりしている。

日本における社会的地位によって対人関係を形成するなど「日本社会の再生産」を彷彿とさせる語りは見受けられず、全員がフランス生活内で日本人以外とも関わりを持って生活している。しかしフランス人との人間関係の構築については「友人」など親密さを表す表現が用いられることが少ない。フランス人以外の外国人の友人の方が多いと語る情報提供者が目立ち、フランス人との関係構築は恋人や家族などに集中している様子が浮かび上がる。

フランス／日本に対する表象の提示は対立項を形成し、評価が一方に偏ることが少ない。評価の中立性は大規模アンケート調査のように複数の情報提供者の語りの比較によっても見出されるが、一人の情報提供者の語りの中にも見られる。このことは内包された個人の経験が、その事象に対する表象の構築の過程で重要な位置を占めていることを示す。フランスに対する好意的な表象として「働き方」が日本の「働きすぎ」に対応する形で提示されることが多々あったが、このことから情報提供者が「伝統的経済移民」ではなくともフランス生活の仕事と金銭に関連する事柄に重要性を見出していることが予想される。情報提供者はフランスで生活する自分自身を「日本人」や「外国人」と感じると述べることが多いが、それに対する見解も肯定的である場合と否定的である場合の両方が見受けられる。また自身を「フランス人」と感じるためには言語や習慣の内包以外にも「外見」を変える必要があることが情報提供者の発話からうかがわれる。

今後の予定に関しては、情報提供者自身の意思が語られるものの、家族や恋人、職業上の制約などの周囲の人々の考えや行動、置かれている環境を通して説明される傾向が強い。また恒久的滞在の希望に言及する者はおらず、遠くない将来に生活の場をフランス以外に移す可能性が語られることも多い。日本への帰国も選択肢として言及されるが、第三国への移動が示唆されることも稀ではない。生活の地の決定要素としては就職の可能性が言及されることが多く、フランスでの生活を望みながらも就職が困難な場合には日本へ帰国すると語る情報提供者も存在する。このように本研究の情報提供者の移住は「出稼ぎ移民」とは全く別の様相

を呈すが、収入について「悪化」を予見していることは興味深い。そして多くの場合実際に収入は悪化するようであるが、彼らの談話からは生活の「質」の向上を見出しフランス生活を継続している様子が浮かび上がる。

情報提供者はフランス移住を「軽い気持ち」や「流れ」で行ったような語りを言う傾向にあり、これを通して浮かび上がる彼らの移民のイメージは「祖国を捨てる悲劇」でも、「壮絶な困難に立ち向かう勇敢な英雄の物語」でもない。さらに移住先での生活は、その社会や文化、住民と自身のエスニシティを対峙させその差異に苦しむ経験でも、それらに完璧に同調し、その地の住人の人間関係にすっかり溶け込むことが求められるものでもないようである。分析によって明らかとなったこれらの特徴からは、本研究の情報提供者の移民が一章で触れた区分や異国の地で苦難に直面する「移民」のイメージには収まらないことが明らかとなる。

主体の複数性に焦点を当てた移住談の分析と結果の考察では、移住経験にまつわる出来事やそれについての語りが主体の複数性を顕著化することが確認される。

まず「使用言語と自己イメージ」について、多くの情報提供者は使用する言語によって様々な自分自身の存在を感じていると述べている。言語習得は実利的な側面を持つだけではない。情報提供者が「使用言語によって変化する様々な私」を語るという事実は、彼らがその言語を独自の方法で内包していることを示し、第一言語ではない言語で発話をする「私」は「本当の私ではない」と言った、未だにあらゆる場面で見受けられる「単一言語」の視点からなされる議論はこの豊かな現実を覆い隠してしまっていることは明らかである。

移住経験の語りを通して行われる自己イメージの構築の分析では、移住経験の語りは単なる情報発信だけではなく、語り手の価値観や信条、想像界に結びついて発話主体が独自に自己イメージを構築する場合もあることがわかる。移住経験を通して行われる自己イメージの構築は「勇敢なヒーロー」以外にも「真面目」や「性的魅力のある女性」、「現実主義者」と多様なものが見受けられたが、どのような場合も彼らのフランス生活の独自の意味付けと考えられ、いずれの場合も情報提供者のポジティブなイメージ構築であると言える。

数名の情報提供者の語りの中には言及されるフランス／日本に対する表象と彼らを取り巻く実際の状況が一致しないものが見られた。情報提供者はフランスで「反表象」の現実を生きているにも関わらず、渡仏前に内包した紋切り型の表象を保持し続け、それはフランスを語る際に「条件反射」のように表出する。しか

し「私 je」の生活の描写はその表象に当てはまらない出来事を含んでいる。これは情報提供者が不特定の何者かに対する社会的に耳にする表象、実際に情報提供者の身近に存在し接触のある人びととその表象、という複数の構築を平行して行い、そのどちらをも内在させながら語っていることを意味しており、主体の複数性を顕わにしていると言える。

一つのテーマに対する評価の逆転に焦点を当てた分析は、大規模なアンケート調査で複数の回答者から得られた情報をまとめた結果がすでに一主体内に存在する時点ですでに主体の複数性を明らかにしていると言える。さらにこれに関連する談話を見ると、情報提供者がテーマに関して捉え方や評価を様々に参照先を変えながら流動的に、時には彼らの中に矛盾をも孕む形で構築し発話している様子がわかる。その際の発話には「同時に」、「時には」などの表現が頻出する傾向が見られ、これは主体が「～で、～で、～である」という流動性、複数性、同時性のもとに成り立っていることを如実に表している。

情報提供者は「フランスに2年以上滞在する日本人」以外にも語りの中で自身を様々に特徴づけ、他者との差別化を図る。このことはまず固定化された一つの透明で均質なグループ構築が困難であることを示唆している。さらにこの「他者との差別化」の分析からは、フランス在住日本人の移住談に見られる「英雄化」に類似するポジティブな自己イメージ構築の傾向が見出される。自足の日本から教育や経済の面で同等とも言えるフランスへ移住する彼らにとっては日本での安定を手放すことが「乗り越えなければ困難」とも言え、その勇敢な行為の先で新たな視点や考え方を手に入れるということが一種の「不足の獲得」であるとも考えられる。その談話の構築は、日本社会や日本人を語る際には情報提供者自身の非・日本らしさ、フランス在住日本人やフランス人と自身を差別化する際には自身の非・フランスらしさに焦点を当てながら行われていることが特徴として挙げられる。自身と類似するプロフィールを持つ者のグループを構築し、彼らが持ち得ないものを手に入れたこと、彼らと異なっていることを示すことはこれまでの移民と一線を画す本研究の情報提供者の「英雄化」に代わるポジティブなイメージ構築の一つのモデルとなり得る可能性が浮かび上がり、本論ではこれを「先駆者化」と名付ける。

人称表現に注目して行った談話の分析では、数名の情報提供者が日本語に対応する表現がない人称代名詞 « on (人, 人々, 誰か, ある人, 我々) » の使用を通して、話題となっている行為を実践する人びとのグループに自身を含めるか否か

を精緻に表していることがわかる。これを分析することによって、彼らが一つの話題内でも自分の所属するグループを移動したり様々の境界線を流動的に引きなおしたりする様子が浮かび上がる。日本語でこの全ての人称マーカの訳を明示すると発話は不自然なものとなるため、この観点からの主体の複数性の抽出にはフランス語の使用は適していると言える。

情報提供者の「はい oui」、「いいえ non」に着目した分析では、彼らの内に見えない「第三の主体」が存在する可能性が浮かび上がる。筆者以外の何者かに向けられている「はい・いいえ oui / non」は情報提供者がテーマに関する意見や評価を転換させる際に見受けられることが多く、短い沈黙や逆説の表現を伴い迷いや不確かさと共に表出する傾向がある。これを伴いながら中立を保つように前の発話の内容を覆す情報提供者の語りは、「語り手」である情報提供者が「聞き手」をも兼ね、日本人の談話構築の特徴でも発話の共構築を情報提供者がその内に存在する他の参加者で行っているようである。この見えない主体は、発話主体がこれまで述べていた事柄や意見を逆転させうる重要な主体と考えられ、「自己相槌」はこの重要な主体の現れの前触れや指標と考えられる。

ケーススタディ形式のインタビューの分析では、どのような日本人がどのような移住をしているかを詳細に描写しながら、彼らの語りの特徴や生活の実態、そこに見出される彼らの多元性を考察した。情報提供者はフランスへの移住経験を語る中で「フランス在住日本人」という自身の特徴や地位以外にも様々な自己定義を行い、それが移住経験を語るための重要な事項であること指摘できる。また一つのテーマに関しても姿勢や評価が語りの中で変化する様子や、一見不可解に思われる行動や選択を説明する語りからは、移住経験を語る発話主体が談話の中で様々に視点を変え、その経験とそれを生きる自身を構築し、それぞれが移住経験に独自の意味を与えていることがうかがわれる。移動、流動、断絶の経験である移住を語ることは、この多様で多元的な主体の現れの間であることは明白であり、また同時にその多元性をもって成立するものであると言える。この主体の複数性は移住という経験の語りの中で顕著化されるが、これは主体の本質とも言えるものであり、「フランス在住日本人の生活についての情報提供」という側面も持つこの分析は、国や言語、文化のレベルで移住の経験をしたことがない者でも共感できる描写や分析が多く含まれている。本研究で示したように「主体の均質性」に疑問を呈し我々の本質である複数性を考慮に入れることによって、学術研究に

おいてのみならず，我々一人ひとりが「移民」やそれを取り巻く諸問題をより身近に感じ，これまでとは異なった視点から，あるいはより深い考察を行うことが可能となるであろう．